

2015年4月4日

塩谷祐人 博士論文（論文博士）審査報告

審査委員長 石川美子

表記の博士論文審査請求に関し、審査委員会では論文審査および口述試験を実施した結果、全員一致で合格と判定いたしましたので、ここにご報告いたします。

請求者氏名 塩谷祐人

論文名 現代「フランス」文学における亡命文学の意義と役割
ミラン・クンデラ、アンドレイ・マキーヌ、アゴタ・クリストフを中心に

審査委員会 委員長 石川美子（本学文学部教授）

委員 朝比奈弘治（本学文学部教授）

委員 星埜守之（東京大学大学院総合文化研究科教授）

I 審査内容

1) 先行研究と本論文の意義について

政治、民族、宗教など、さまざまな理由で他国に亡命した作家たちによる「亡命文学」を総括的に論じることはきわめて困難である。どのような理由で亡命し、どの国からどの国へ向かい、亡命後はどの国の言葉で作品を執筆しているか、などといった問題が、作家ごとに大きく異なっているからである。

本論文は、東ヨーロッパからフランスに亡命してフランス語で作品を発表している現代作家3人を中心にすえて、フランス文学における亡命文学の意義と役割を問い論じたものである。そのような「フランス文学における亡命文学」の総括的な研究は、フランスにおいてもきわめて少なく、個々の作家研究あるいは短い論文にとどまっていることが多い。日本においては、総括的研究はほとんどなされていないと言ってもよいであろう。こうした現状において、本論文は、本格的なフランス亡命文学研究として画期的なものであるとすることができる。

本論文は、まず「亡命文学」の定義と考察をすることから始まっている。つぎに、20世紀後半に東ヨーロッパからフランスに亡命し、母語ではなくフランス語で作品を発表している小説家3人の作品や状況の詳細な分析へとすすんでゆく。そして、3人それぞれの「小説の言語」の分析をつうじて、亡命文学全体のかかえる問題へ、フランスの国民文学とは何かといった問題へ、と論を遠心的に広げている。その論述手法は説得力のあるみごとなものである。

さらには、本論文を読む者を触発して、亡命文学についてさまざまな観点から真剣に考えさせ、議論を生みだしてゆく、という問題提起の力をもった刺激的な論文であるということもできる。

2) 本論文の構成と内容について

論文は、3部からなり、各部は3章ずつで構成されている。以下に、論文の詳細な目次をしるし、その内容について、章ごとに要約する。

序論　　まずはじめに「亡命」および「亡命文学」とは何かについて定義・考察をし、本論で中心的にあつかう3人の作家（チェコ出身のミラン・クンデラと、ロシア出身のアンドレイ・マキーヌ、そしてハンガリー出身のアゴタ・クリストフ）を導き出す。

第1部 フランス文学の外部／内部の亡命作家

第1章 フランス文学が内包する国有化の機能

フランス文学の威光とフランス語が支える国民文学について考察し、「亡命文学」もまた、フランス文学のなかに取り込まれてゆくさまを検討する。

第2章 囚われと逃走の亡命文学 - アンドレイ・マキーヌの例

アンドレイ・マキーヌが、フランスの作家とみなされながらも、ロシアの作家ともみなされているという状況について考察する。

第3章 ミラン・クンデラの『無知』をどう読むか

クンデラが『無知』をチェコ語ではなくフランス語で書きながらも、出版はスペインなどの他国を優先してフランスでの出版を遅らせているという「所属への抵抗」について論じる。

第1部結論　　亡命文学は、フランス文学にたいして、内に向かう力と外へ向かう力として機能していることを述べる。

第2部 亡命作家の言語

第1章 二つの言語の間 - アンドレイ・マキーヌの普遍言語

マキーヌが、ロシア語とフランス語のあいだにある「普遍言語」を見出し、その「普遍言語」によって作品を書こうと望むにいたるさまを考察する。

第2章 哀しみの中の執筆 - アゴタ・クリストフの挑戦

クリストフは、苦勞して学んだフランス語で執筆をしながらも、そのことがハンガリー語を忘れさせることになるゆえにフランス語を「敵語」と呼んでいるという状況について考察する。

第3章 ミラン・クンデラの言語 - 『不滅』と『緩やかさ』を中心に

クンデラが、チェコ語とフランス語との違いを取りはらって、チェコ文学でもフランス文学でもないヨーロッパ文学を書くことをめざしている点を論じる。

第2部結論 亡命作家たちはフランス語で書くことによって、かえってフランスから遠ざかるのであり、自分の作品をフランスの外へ亡命させようとする好意となっていることを述べる。

第3部 国民文学と世界文学の間で

第1章 国の言語と小説の言語

亡命作家たちは、フランスという国の言語としてのフランス語とは異なる、「小説の言語」としてのフランス語によって作品を書こうと望んでいることについて考察する。

第2章 理想の「小説」を求めて

3人の亡命作家それぞれがフランス文学に吸収されながらも、彼らの作品のもつ外へ向かおうとする力によって、フランス文学の構造が内部から変えられてゆくさまを論じる。

第3章 フランス文学の中の亡命文学

亡命文学はフランス文学にたいして同化と叛逆とを同時におこなうのであり、そのことがフランス文学に新たなダイナミズムと豊かさをあたえていることを述べる。

第3部結論 亡命文学は、ひとつの「国民文学」と、どこの国にも属さない「世界文学」とを結びつける可能性であることを述べる。

結論 亡命文学とは、フランス文学の内部にありながら外部でもあり、フランス文学の資産をより豊かなものとしながら、フランス文学のフランス性に叛逆もしている。このようなパラドクスをもつ亡命文学は、文学そのものの深さと広がり可能性をしめしているものである、と結論する。

参考文献 404 点にのぼる文献が挙げられている。

添付資料 論文要旨（日本語とフランス語）がつけられている。

3) 本論文の評価について

「現代フランス文学における亡命文学」の総括的な研究は、フランスにおいてもきわめて少なく、日本においてはほとんどなされていない。このような現状において、本論文は「フランス亡命文学」の機能を本格的かつ詳細に論じながら、視野をフランス文学の未来へ、そして世界文学の可能性へと広げて論じている点で、大いに評価することができる。

また、亡命文学を取りこむ国民文学のシステムと、それに抵抗する亡命文学、という観点から論じることによって、亡命文学と国民文学の関係を明確に際立たせることに成功している。論の流れのなかで同じことをなにか繰り返しながら、その都度、新しい点を積みあげてゆくという手法を用いており、それによって説得力を強めていると言うこともできる。

中心となっているのは3人の現代作家の作品分析であるが、そのために3人の作品や記事を90点近く、それ以外の参考文献を300点以上と、膨大な文献を駆使しており、その研究の幅広さと奥行きは賞賛に値するものである。ただし、文献を縦横無尽に用いた結果として、議論が参考文献の影響を受けてしまった箇所が若干みられる点は惜しまれる。

また、「普遍言語」や「世界文学」といった概念がやや説明不足でわかりにくい点や、3人の作家が亡命した時期と状況が歴史的な観点から説明されていない点な

どの問題点も見られるので、今後の研究においてそれらの点について考察を深めることが期待される。

いずれにせよ、「フランスにおける亡命文学」について詳細かつ総括的に論じた本論文は、この分野における画期的なものとして高く評価することができる。今後の亡命文学研究にたいして大きな問題提起をし、議論を生みだしてゆくことが期待できるという点でも、意義深い論文である。

II 審査結果

2015年2月5日に塩谷祐人が論文を提出した後、本学教員2名と東京大学大学院教授1名からなる審査委員会が発足した。そして2015年4月4日に3人の審査員による口述試験が実施された。

口述試験は、公開でおこなわれた。まず最初に、論文提出者による論文概要の説明があり、つぎに審査委員2名による講評と質問がなされ、つぎに審査委員長による質問と総括的な講評がなされた。講評や質疑応答は2時間以上におよび、論文の内容についての詳細かつ厳密な議論がおこなわれた。

口述試験の後、審査委員による厳正な審議がなされ、全員一致で塩谷祐人の口述試験における合格が決定された。

以上の過程を経て、審査委員会は、塩谷祐人の博士学位審査請求に関し、全員一致で合格という結論に達した。

以上